# 職能の倫理

市川白弦

## 一

Persona がもと希臘および羅馬の舞臺劇において俳優が用ひる面であり、やがてそれが役割を意味することになつたのは、人の知る通りである。クロイスラーの羅典辭書にしたがつて、この推移を分けるならば、次の通りである。

Persona. Maske, Larve der Schauspieler.（俳優の面）

1. Rolle, Character eines Schauspielers.（俳優の役割）
2. Rolle, die Jedermann in der Welt spielt.（世の中において各人が演ずる役割）
3. die Person, die eine Rolle spielt.（或る役割を演ずる人物）
4. Person.（人）

この事情にしたがつて、社會における役割としての人間の在り方を、しばらくペルソナと呼ぶことにしよう。われわれ各自のペルソナは決して單一ではない。ひとは單一な生活圏において單一な

間柄に於いてあるのではないからである。ひとりの俳優がさまざまな面をつけて登場することは、一面において、ひとりの人間がさまざまなペルソナとして存在するといふ事實の模像的表示であり他面において、ひとは面をつけるならば一應どのやうなペルソナをも經驗し得るといふことの象徴でもある。

ペルソナにどのやうな種別があるにしても、それらは役割として職能として、多少ともおほやけの性格をもつことにおいて一つである。ペルソナは個人的な意慾を制肘するやうな、もしくは或る種の要求を私的なるものとして規制するやうな、組織的關聯をもつてゐる。こゝにペルソナの嚴肅性がある。この嚴肅のゆゑにひとは往々その墮落から衛られるのである。ひとりの常人がそのペルソナの衣裝を着けるとき、多少とも敬意を以て遇せられるのは、我も人もそのペルソナにおける公的秩序の嚴肅に接するからであり、また逆に滑稽視せられるのは、かれの個人的性能乃至人間的價値とそのペルソナにおいて表示される嚴肅乃至榮譽との不調和が意識せられるからである。制服と呼ばれるものは、物を媒介とするペルソナの公的嚴肅の表示であり、表示を媒介とする再認識であり、謂はば一種の面である。しかし公とか嚴肅とかいふものは、必ずしも眞に公正だとは限つてゐない。時にはそれが他の私の擬裝であつたり、威嚇もしくは畏縮の擬態であつたりする。ペルソナは正しき倫理に基礎づけられてゐなければならぬ。

## 二

通常、社會における人間の現實的な在り方はペルソナであるが、しかしペルソナが人間のすべてゞはない。面と制服を着けない人間、ペルソナに盛り切れない人間性がある。菊を東籬の下に採り悠然として南山を見るといふやうな境地は、多少ともペルソナを離れた人間である。尤もかやうな生活によつてその社會に何等かよき影響をあたへ得るとすれば、それもひとつのペルソナだとも考へられる。但しそれは觀點を異にする語法によるものである。

雪峰問僧、閣黎名什麼。曰玄機。師曰日織多少。曰寸絲不ㇾ挂。(下略)　宗鑑法林卷四五

この僧は後に雪峰に打たれてゐるが、それはともかく、日々ペルソナの多彩を織り成しつゝ、しかもそこに寸絲をかけざる風光がある。この清明こそやがてペルソナの倫理性を吟味する所以のものである。赤肉團上一無位の眞人在り。無位の眞人はもはや單なるペルソナではない。却つて一切のペルソナ的なるものを超えたものである。世間虛假といふ言葉があるが、無位眞人の見地よりすれば、世間のペルソナは假面であり、芝居にすぎないとも言はれ得る。希臘人は俳優を Hypokrites と呼んだが、この言葉が新約聖書において Hypocrite の現在の意味、卽ち僞善者の意味に轉化せられたことは偶然ではない。僞善者は假面を着けた人間である。人間は劇的動物 (dramatic animal) だと言はれるが、マスクを着けて舞臺に舞ふ間は自然で純眞で幽雅な人間も、マスクを脫いで現實

界へ下りて來ると、いまひとつのマスクを着けていまひとつの劇を演じ始める。マスクを與へよ、然らば人は眞實を語るならん、とオスカー・ワイルドは言ふ。これはさまざまに解せられるであらう。面と呼ばれるものには、純なる美的心情において活かされる面もあり、單に譬喩的な面、たとへば僞善を意味する假面、匿名を意味する覆面などもあり得るからである。しかし何れにせよ人が眞實なる生を生きるためには、世俗的關心からの解放を必要とする。かの藝術上の面を着けることは、ひとつは着けられた面によつて、人も我も一應この現實的紛紜を括弧に入れ、世俗的關心の世界から遮斷されるといふ象徴的現實的效果を目ざすのであらう。おもふにワイルドの面はそのやうな象徴的面であり、關心的分別を離れた世界において、人間の最も深く美しきものが實現せられる、とかれは考へたのである。

## 三

今日では個人とか人間とかいふものはもはや存在しないと云はれる。われわれの生活は、われわれの思考をも含めて、くまなく國家によつて統制せられ秩序づけられねばならぬからである。この統制は一切の生活部面をペルソナとして組織することを意味する。いはゞ良寛も桃水も今日では紛れもなきペルソナとして、公職的存在たることが要求せられる。無位眞人の公職化が求められる。近年、佛教々理精神の根本的變革と呼ばれるものも、この要求への應答だと見られよう。しかしこ

の事態はこれまで辿つてきた論理と、どのやうな聯關をもつであらうか。

雲門曰、世界恁麼廣闊、因甚向鐘聲裡披七條。

無門曰、大凡參禪學道、切忌、隨聲逐色。（下略）　無門關第十六則

無位眞人が自らペルソナへの道を急ぐことは、度生の行願にいそしむかに見えて、實は聲色に隨ひ十二時に使はれて、本來の面目を失ひ却つて眞實の行願を忘却することではないのか。新しき世代の鐘聲に應じて、新しきペルソナを着けて出頭するのは因甚であるか。

## 四

自在に世間の聲を觀知し、それに應ずる接化の手段を行ずるのが菩薩の大行だとせられる。如何なる鐘聲裡にも七條を着けぬとすれば、それは無念無想の寂默を以て究竟とする死禪であるか、または獨り退いて禪悅を弄ぶ自己陶醉である。それはまさに idola specus（洞窟の偶像）であつて、眞に無礙なる解脫の世界ではない。大悲の妙用、萬境に隨つて轉ずる活潑々地の創造的自由は、このやうな閉ぢた世界にはあり得べくもない。大慧宗杲が默照禪の弊を難じた根本の理由がこゝにある。それば かりではない、如何なる狀況の變化においても、かたく舊時のペルソナ的性格を守るとすれば、それは往々生活の硬化、創造性の喪失にほかならず、決して新しき狀況を救ふ所以ではない。新しき事態を救ふには屢々それに應ずる新しきペルソナ的性格を必要とする。一生受用不盡底の一指は

却つて圓融無礙な應化の端的に輝く。

## 五

さて鐘聲裡に七條を着けるのはもとより無作の妙用であるが、この自由が生れるまでには、鐘聲裡に七條を着ることの意義が吟味、認容せられてゐる筈である。自由にして而も節にあたる行爲は常に適正な吟味を前提とする。さうでなければそれはひとつの氣まぐれであるか、または他律的なドクサ的行動にすぎず、したがつて眞の自覺と內面的必然を缺く意味においてひとつの物眞似であるか、または或る種の阿附であらう。鐘が鳴れば何時も七條を着けるのではない。そこに主體的な自覺がなくてはならぬ。それは出頭の鐘ではないとか、その打ち方は面白くないとか、今はその時ではないとかいふやうな把住の眼識を缺いて、どうして隨處に主であると言ひ得よう。東洋的人間を久しく支配した汎倫理的思考は、自然を敬愛すべきものに美化深化したとともに、他面歷史的必然を自然的必然の如くに感受せしめたことも、その事例に乏しくない。もし東洋的深玄から區別せられる東洋的＝中世紀的蒙昧ありとするならば、それはこの事情のうちに淺からぬ素因をもつと言へるであらう。鐘聲七條の話頭に關して、古人は「お手が鳴ればハイと應じて出る」と示してゐる。聲に應じて出るのはひとつのペルソナを行ずることであるが、このペルソナに上記の自主性がないとすれば、それは單なる土偶である。住する處なき而も乾坤一枚の有時（道元、正法眼藏有時、參照）は、無定

見なペルソナの付替へ塗替へではあるまい。竹密にして流水の過ぐるを妨ぐといふのでは、そこに何の清明、何の解脱があらう。

無位眞人は無位眞人として歴史的現實から遊離するのではない。遊離はひとつの固定した位置付けであつて、眞實に無位なるものではない。無位なるものは却つて何らかのペルソナとして現實に生き働らくものでなければならぬ。しかもそこにおのづからペルソナを超えた消息がある。觀自在の三十三身は、一切のペルソナを超えた根源的主體における眞に自主的なペルソナに外ならぬ。應ずるは化するがためである。和光同塵は光を失つて塵にまみれ去ることではなく、塵々光を放たしめるための行願である。

すべてのものに眞によきペルソナを與へるとゝもに、すべてのものがその與へられたペルソナにおいて、莞爾として純一無雜に生を遂げるやうな倫理を確立し宣布し、それに適應しそれを支持する體制を整備することが、政治倫理の核心でなくてはならぬ。いはゆる法住法位、世間相常住（法華經）の世界はひとつの美しき諦觀であるが、さらにそれは凡ゆる生活圏の成員が、主觀的にも客觀的にも、そのペルソナにおいて眞によく且つふさはしき處を得る理想的世界だと解釋することもできるであらう。隨時隨處の好日において、萬人のためのよりよき好日を行願することは、ペルソナの倫理であるか、それともペルソナを超えた倫理であるのか。何れにせよおのがペルソナに純一に生き

る悦びと感激とは、ペルソナの別をも忘れた悦びと感激とを含んで、この世界を二重に美しくめでたきものにする。このことがなければ、くまなく組織されたペルソナの世界は、悪しき意味における官僚的冷厳に陥るかもしれないのである。

仰山問"三聖"、汝名什麼。聖云、慧寂。仰山云、慧寂是我。聖云、我名慧然。仰山呵呵大笑。

碧巌集第六十八則